

『支え合って守るもの』

足立区立谷中中学校 三年三組

林 馨

「ピーポーピーポー…。」

母が救急車で運ばれた。いつも家の外から聞こえてくるサイレンの音が、その日は自分の心臓の音と重なって、より一層うるさく、不安を掻き立てるような唸り声と化していた。

初めて119と電話のボタンを押したあの日のことは暫く忘れないだろう。まさか自分の家族が緊急の事態に直面することになるとは思いも寄らず、ただ心配することしか出来ない自分の無力さを痛感した。そんな時、私の心の支えになったのは電話越しの一言。

「分かりました。直ぐに向かいます。」

という光が差すような心強い言葉だった。

夜であったのにも拘らず、救急車は迅速に家の前に到着し母を運んでいった。幸い母はその後、無事に帰宅することが出来たが、家の近くに病院が無く、さらに歩ける状態でなかった母を運ぶ救急車が無かったらと思うとぞつとする。命の危うさを知った夜だった。

私たちが命を預けて走る救急車だが、「どうして救急車はいつでも無料で駆け付けてくれるのか。」と、ふと今まで考えてもみなかった疑問が頭をよぎった。例えば、飲食店では会計時に各々自分でお金を払い、それが店員の給料となる。そうすると、救急車本

体の費用や救急隊員の方々の給料はどこから来るのだろうか。さらに消防車や警察を呼ぶ時も同様にお金が掛からない。一銭も貰わずに毎日消火をしたり命を救ったりしてくる、なんて都合のいいことはあり得ないだろう。調べてみると、その出所が税金であるとは分かった。

さらに詳しく調べてみたところ、仮に有料化すると大体救急車を呼ぶために約五万円もの費用が掛かるそう。コロナ禍や夏の熱中症などで運ばれる人が絶えない中で、それらの莫大な費用を賄うのが私たちが日々払っている税金なのである。私がいつも何気なくコンビニや文房具店で支払っていた消費税がめぐりめぐって人々を助けるための金銭的な援助に繋がっているということに深く驚いた。普段意識せずに払っていた「税金」というものが人助けになっていると思うと嬉しかった。皆の健康を皆で守り合っている、そんな社会の循環がとても素晴らしいと感じた。

勿論、税金の種類やパーセンテージは国によって異なり、それぞれの良さがある。しかし日本のように税金を医療のために使い、救急車や消防車を無料で呼べる国というのは非常に少ない。有料だと家計の都合などで呼びづらくなってしまい、容態が悪化してしまうかもしれない。緊急時に安心して助けてもらえる、そんなことが出来るのが日本の良さの一つなのではないだろうか。他にも日々使う公共施設なども税金でできていると知った。

お互いの支え合いが次の世代へと繋がる。税金という手段で、より良い社会づくりに貢献していることを理解し、私たちは命を大切にできる環境にあるということを忘れずにこれからも生きていきたい。